

Osaka Mozart Ensemble

62. Konzert

Klavier Kyoko Tagawa

Sopran Noriko Yomo
Alt Yumiko Nakahara
Tenor Tomo Matsubara
Baß Hiroaki Hagiwara

Orgel Ayako Kuwayama

Chor Coro di Kameoka
Chorleitung Kazuo Itakura

Orchester Osaka Mozart Ensemble
Konzertmeister Masato Ohnishi

Dirigent Hiroshi Takemoto

14:30 Uhr Samstag, 30. Januar 2016
Toyonaka Municipal Rose Bunka Hall

《Programm》

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング アマデウス モーツァルト

La clemenza di Tito KV 621 (1791)

オペラ・セリア「ティート帝の慈悲」より

Ouverture: Allegro

No.1 Duetto: Andante - Allegro

No.2 Aria: Larghetto - Allegro

No.4 Marcia: Maestoso

No.9 Aria: Adagio - Allegro - Allegro assai

Solo-Klarinette: Yumiko Nagira

Konzert für Klavier und Orchester D-Dur „Krönungskonzert“ KV 537 (1788)

ピアノと管弦楽のための協奏曲 第26番 二長調「戴冠式協奏曲」

I. Allegro

II. *Larghetto*

III. *Allegretto*

..... 休憩 Pause

Missa C-Dur „Krönungs-Messe“ KV 317 (1779)

ミサ曲 第15番 八長調「戴冠式ミサ」

I. KYRIE: Andante maestoso - più andante - Maestoso come prima

II. GLORIA: Allegro con spirito

III. Sonata all'Epistola KV 329 (317a)

IV. CREDO: Allegro molto - Adagio - Primo tempo

V. SANCTUS: Andante maestoso - Allegro assai

VI. BENEDICTUS: Allegretto - Allegro assai

VII. AGNUS DEI: Andante sostenuto - Andante con moto - Allegro con spirito

《Einführung》



多川 響子 Kyoko Tagawa ピアノ

京都市立芸術大学音楽学部卒業および同大学大学院音楽研究科修了。ドイツ・ドレスデン音楽大学卒業。

在独中にはドイツ、ポーランドで様々な演奏会に出演する。第9回宝塚バガ音楽コンクール入選。コントラバス奏者サンデル・スマランデスク氏と行ったデュオリサイタルに対し2002年度バロックガール賞受賞。2009年～2011年に大阪・京都で開催した全9回シリーズ「ベートーヴェン ピアノナタ完全全曲演奏会 ～35のソナタ～」は日本経済新聞をはじめ各紙に取り上げられるなど大きな話題を呼んだ。ソロリサイタルを行なう他、オーケストラとの共演、室内楽など多方面で活躍している。

現在、京都市立京都堀川音楽高校、滋賀県立石山高校音楽科非常勤講師。



四方 典子 Noriko Yomo ソプラノ

同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修生修了。

読売新人演奏会、日本センチュリー交響楽団「星空ファミリーコンサート2007」、京都市交響楽団「こどものためのコンサート」、青島広志のおしゃべりクラシック、おいしいクラシック2011、三代澤康司のドッキリ！ハッキリ！クラシックです！など多数の演奏会に出演。また、第九や宗教曲のソリストを務める。オペラでは、「椿姫」ヴィオレッタ、「魔笛」夜の女王、「ラ・ボエーム」ムゼッタ、「フィガロの結婚」スザンナ、「ゴジ・ファン・トゥッテ」フィオルデリーゼ、「天国と地獄」エウリディーチェ、「つばめ」リゼット役で出演。

関西二期会会員。



中原 由美子 Yumiko Nakahara アルト

同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修生修了。

第12回高槻音楽コンクール奨励賞。同コンクール入賞者特別演奏会に出演。第42回なにわ芸術祭新進音楽家競演会、「大阪クラシック～街にあふれる音楽～」等の演奏会、ヘンデル『メサイア』、ベートーヴェン『第九』にソリストで出演。オペラでは『蝶々夫人』スズキ、『魔笛』侍女3、『フィガロの結婚』マルチェリーナ、『ヘンゼルとグレーテル』ヘンゼル、『椿姫』アンニーナ、『ばらの騎士』演奏会形式にオクタヴィアン役で出演。

米良俊弼、金谷良三、田中千恵子の各氏に師事。関西二期会準会員。茨木市音楽芸術協会会員。



松原 友 Tomo Matsubara テノール

東京藝術大学卒業。同大学院修了。ロームミュージックファンデーション、野村財団奨学生としてミュンヘン音楽大学院、ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科卒業。

第51回全国学生音楽コンクール全国大会第1位。第14回松方音楽賞、第81回、第83回日本音楽コンクール第3位・岩谷賞受賞。これまでヨーロッパ、日本各地でのリサイタル、オラトリオの公演をはじめ、ミュンヘン放送管弦楽団、ノイエホフカペレミュンヘン、新日本フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団等のオーケストラと共演。NHK リサイタルノヴァ、ルールトリエンナーレ、小澤征爾音楽塾、サイトウキネンフェスティバル、PMF 音楽祭に出演。小澤征爾、ウルフ・シルマー、準・メルクル、インゴ・メッツマッハー、大植英次、山田和樹他、国際的な指揮者と共演を重ねる。同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、大阪府立夕陽丘高校各非常勤講師。二期会会員。



萩原 寛明 Hiroaki Hagiwara バス

京都市立芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了。ウィーン国立音楽大学卒業。

オペラでは、「ドン・ジョヴァンニ」のタイトルロールをはじめ、「フィガロの結婚」アルマヴィーヴァ伯爵、「カルメン」エスカミーリョ、「蝶々夫人」シャープレス、「椿姫」ジェルモン、「タンホイザー」ヴォルフラム、「ランメルモールのルチア」エンリーコ、「メリー・ウイドウ」ダニロ、「こうもり」ファルケ等、多数出演。また演奏会のソリストとしても定評があり、宗教曲や第九等に多数出演、著名指揮者やオーケストラとの共演も多い。

現在、神戸女学院大学、兵庫県立西宮高等学校音楽科各講師。関西二期会、日本シューベルト協会、西宮音楽協会各会員。



桑山 彩子 Ayako Kuwayama オルガン

エリザベト音楽大学卒業、同大学大学院修了、フランス・リヨン国立高等音楽院を審査員満場一致のプルミエ・プリを得て首席で卒業。

第6回ゴットフリート・ジルバーマン国際オルガンコンクール優勝。2008年度、京都市芸術新人賞受賞。

オルガンを山崎陽子、ジャン・ボワイエ、リーズベス・シュルンベルジェ、ルイ・ロビヤール各氏に師事。

京都カトリック河原町教会オルガニスト。

《Einführung》

亀岡混声合唱団 Coro di Kameoka

Chorleitung:	板倉 計夫					
Soprane:	岩下 浄子	菊地 紹子	吉瀬 澄子	四方 智美	中村 幸子	西脇 鈴代
	松倉 春子	宮田 佳子	森山 邦子	八木 文子		
Alte:	岩崎 弓子	片矢 菊枝	小仲 澄江	澤田 智子	山崎 佳子	吉田 千賀子
	依田 知子					
tenöre:	板倉 計夫	桐 幸雄	組藤 明哉	都鳥 弘紀	国 正志	森永 正幸
Bäße:	井上 吉朗	菊地 葛雄	日下 昌彦	小寺 邦明	中野 莞爾	平田 稔夫

1986年、亀岡第九を歌う会のメンバーを中心に発足し、1991年、板倉計夫を指揮者に迎え、亀岡にて第2回の定期演奏会を開催した。1997年、イタリア ベスカーラ市ロザリオ教会で演奏会を開催、イタリア・韓国人の独唱者と共にモーツァルト「戴冠式ミサ」を演奏し、満員の聴衆から総立ちの拍手を受けた。1993年より大阪モーツァルトアンサンブルとのミサ曲の共演が始まり、今回で24回目となる。

大阪モーツァルトアンサンブル Osaka Mozart Ensemble

Intendant:	武本 浩					
Konzertmeister:	大西 正人					
1. Violine:	藤井 聡子	久保 聡一	小谷 健	佐藤 奈津子	塩沢 まり子	
2. Violine:	濱田 利正	田邊 明子	高橋 淑子	清水 雅代	筒泉 直樹	横小路 美貴子
Bratschen:	能勢 徹	堀井 博子	河合 士郎	筒泉 直樹		
Violoncelli:	加納 隆	岩田 暢子	近藤 建	加納 千聡		
kontrabäße:	大川 宏明	片岡 充照				
Flöten:	長谷川 淳子	沼田 真奈				
Oboen:	小林 靖之	利谷 久美				
Klarinetten:	柳楽 由美子	向 朱里				
Fagotte:	尾家 祥介	服部 真貴子				
Hörner:	加藤 仁	早瀬 盛治				
Trompeten:	山崎 雅夫	中嶋 香織				
Pauken:	木村 祐					
Posaunen:	石井 倫太郎	山口 亮治	坂井 淳			



1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4～5回の演奏活動を続けている。指揮者を置かずに自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリントツ氏、アドルベルト・スコッチチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にスペトラ・プロティッチ氏と4回共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲をレコーディングした。1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7回出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルテウム大ホール、ヴィーン・ミニリーテン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5回出演。2004年、指揮者なしでのモーツァルトの交響曲全曲演奏を20年かけて完結した。2004年からの多川響子氏との共演は今回で9回目になる。

《Einführung》

戴冠式のモーツァルト

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

最愛の友にして盟友よ —

小生のオペラを指揮するために当地に戻っています。 — 妻は少し良くなりました。 — もう痛みも軽くなったようです。でも60回入浴しなくてはならないので — 秋にはまた出かけて行かなければなりません。 — 効果があればいいのですが。 —

最愛の友よ、目下の差し迫った出費に際して、なにがしかのご援助をいただけるのでしたら、ああ、そうさせていただきます。 — 私は節約のためバーデンに滞在していて、よほど必要でないかぎり町へは戻りません。 — いま私の四重奏曲（この骨の折れる仕事）を、このような窮状でただお金を手にしたいばかりに、お笑い草のような額で手渡さざるをえなくなりました。 — その同じ理由のために、いまクラヴィア・ソナタを書いています。 — さようなら。 — もっとも無理のないところで御用立ていただける分をお送りください。 — あしたはバーデンで私のミサ曲が演奏されます。ごきげんよう — （10時）

いつまでもあなたの
モーツァルト

追伸 またヴィオラをお願いいたします。

1788年6月頃から始まったモーツァルトからミヒャエル・プフベルクに宛てた無心の手紙は、20通が現存している。この手紙は1790年6月12日に書かれたものである。当時、モーツァルトは皇王室宮廷音楽家として年棒800グルデン（204万円）の収入があった。その他にも1787年10月29日、プラーハで初演した「ドン・ジョヴァンニ」の作曲料225グルデン（57万円）、プラーハでの一連の音楽会で演奏料1000フロリン（255万円）を得ている。1787年の収入は、ヴィーンでも高収入の外科医の3倍もあったという。それなのに多額の借金を重ねた理由はよくわかっていないが、主に妻コンスタンツェのバーデンでの湯治のための費用であったと考えられている。バーデンはヴィーンの南25kmに位置し、弱硫黄泉の湧く温泉地である。1790年6月13日、ここでアントーン・シュトルによって演奏されたモーツァルトのミサ曲は、後に「戴冠式ミサ」として知られることになる。アントーン・シュトルは、バーデンの教区教会の聖歌隊指揮者で、モーツァルトはコンスタンツェを療養させるにあたって、彼に色々世話になっていた。モーツァルトはそのお礼として、彼にミサ曲八長調 KV 337、ミサ・プレヴィス 二長調 KV 194(186h)などの自筆譜を贈呈しただけでなく、彼のために1791年6月18日、モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」 二長調 KV 618を作曲している。「戴冠式ミサ」の楽譜もパート譜と共に彼の手元にあった。1791年5月末にモーツァルトからシュトルに宛てた手紙に、「戴冠式ミサ」の楽譜を、「また返すので、クラリネット奏者のアントーン・シュタードラーに手渡すか、すぐに送ってほしい」と伝えている。後述するように、「戴冠式ミサ」は、9月6日にプラーハで行われたレーオポルト2世のボヘミア王としての戴冠式にアントーニョ・サリエリの指揮で演奏されることになる。

1790年2月20日、モーツァルトの良き理解者であったヨーゼフ2世が崩御した。彼のあとを継いだレーオポルト2世は、1790年10月9日、フランクフルト・アン・マインの大聖堂で神聖ローマ皇帝としての戴冠式を執り行うことになる。9月23日、レーオポルト2世は、騎兵1493人、歩兵1336人、馬車104台という大編成でヴィーンを出発し、宮廷楽長アントーニョ・サリエリが率いるヴィーン宮廷楽団員15名と共に、10月4日にフランクフルト・アン・マインに到着した。戴冠式で奏楽を担当したのは、ヴィーン宮廷楽団の選抜メンバーとマインツ選帝侯宮廷楽団である。モーツァルトは常勤の宮廷音楽家ではなかったため、この一行に加えられなかった。しかし、彼は、新しい皇帝に売り込む目的で、ハインリヒ・ラッケンバッハーから1000グルデンもの借金をしてコンスタンツェの姉ヨゼファーの夫フランツ・ホーファーと下僕ひとり連れてフランクフルトに向かった。何とか、大きな仕事を得て困窮状態から脱したいところだった。フランクフルトでは、10月5日にマインツ選帝侯劇団によりモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」が公演される予定であったが、カール・ディッター・フォン・ディッタードルフの「精神病院での恋」に変更されてしまう。そこで、モーツァルトは個人演奏会開催の請願書を提出した。レーオポルト皇帝専任兼戴冠のための参事陪審記録に「1790年10月13日水曜日、皇室コンツェルトマイスター・モーツァルト、明日午前、市劇場にてコンサートを催すべく許可を請願する件につき審議。これにつき、他の前例とせず、に請願許可。」と記される。実際には、10月15日に念願の演奏

会が開催された。そのプログラムは以下の通りである。

寛大な御許可により、本日、1790年10月15日金曜日、市立大劇場において、カペルマイスターのモーツァルト氏はみずからの義捐興行のために大音楽会を催す。

第一部

モーツァルト氏の新作大交響曲。

アリア、シック夫人によって歌われる。

フォルテピアノ用協奏曲、自作を楽長モーツァルト氏が演奏。

アリア、チェッカレッリ氏によって歌われる。

第二部

楽長モーツァルト氏自作の協奏曲。

二重唱曲、シック夫人とチェッカレッリ氏によって歌われる。

モーツァルト氏の即興による幻想曲。

交響曲。

桟敷席および平土間2フロア45クロイツァー、天井桟敷24クロイツァー。切符は、カールベッヒャー小路167居住モーツァルト氏のもとで木曜日午後より金曜日朝まで、出札係シャイトヴァイラーおよび切符売り場で入手できる。

開演は午前11時。

モーツァルトは、この日に書かれた妻への手紙に「きょう、11時に、ぼくの演奏会があった。名誉に関しては素晴らしかったけれど、報酬の点ではお粗末なものに終わった。」と記している。翌日、逃げるようにフランクフルトを発った。この演奏会の模様を記録したルートヴィヒ・フォン・ベントハイム＝シュタインフルト伯爵の旅日誌が残っている。

15日金曜日、朝11時に国民劇場のホールでモーツァルトの大コンサートがあった。私が長いこと所持しているモーツァルトのあの美しい（1）交響曲で始まったが、（2）つづいて素晴らしいイタリア語のシェーナ「私は知らぬ、誰の」をシック夫人がこの上ない表現をもって歌った。（3）モーツァルトは彼の作曲になる協奏曲を1曲弾いたが、これは優美かつ稀にみる魅力をもっていた。彼はアウクスブルクのシュタインのクラヴィアアを使っていたが、これはこの種のものでは卓越したものであるにちがいない、90ドゥカーテンから100ドゥカーテンするものである。この楽器はフレンツ男爵夫人のものだった。モーツァルトの弾きぶりは、いささか故クレフラーをしのばせるが、はるかに完璧である。〔1790年に没したクレフラーはこの伯爵の音楽監督であった。〕

モーツァルト氏は感じのよい顔つきの小柄な人物で、濃海色で綺麗に刺繍されたサテンの服を着ていた。彼は皇帝陛下の宮廷と契約している。（4）ソプラノ歌手〔カストラート〕チェッカレッリが美しいシェーナとロンドを歌った。ブラウーラ調のアリアは彼が得意とするものではなく、彼は優美さと完璧な歌い方を身につけ、すぐれた歌手ではあるが、声音はいささか衰えを見せている。加えて彼の容貌は醜い。なお彼の装飾音をつけたパッサージュは素晴らしい。夏の2、3カ月彼と契約し、ヘンリエッテ〔伯爵の娘〕にレッスンをつけさせてみる必要があるかも知れない。……

第二部で（5）モーツァルトの協奏曲がもう1曲あったが、これは最初の曲のように私を満足させてはくれなかった。（6）二重唱曲は、私たちが持っているもので、「おまえのために、おまえのために」の上行音階のパッセージでそれが分かったのだが……この二人の歌手の声を聴くのはまことに楽しかった。ただし、声と装飾音に関しては、ソプラノ歌手を前にしてシック夫人は引けを取ったが、しかしパッサージュについては少なくとも彼女が勝ったのだった。（7）楽譜なしのモーツァルトの即興演奏はまったく魅力的で、この演奏で彼は自分の才能のすべての力を披露しつつ、この上なく輝いていた。（8）最後のシンフォニーは演奏されなかったが、それというのも、ほとんど2時に近かったので、みんな食事を取りたいと望んでいたからである。

演奏ははたがって3時間も続いたが、その理由は各曲の間にとても長い休憩があったからだ。オーケストラは5人から6人のヴァイオリンでかなり弱かったものの、この点を除けばまことに明快だった。一つだけ嫌なことがあって、大いに気に入らなかった。人があまり入っておらず、私はスッカリ二という名の若い女歌手の隣に坐っていたが、彼女はドイツ人でなかなかいい子だった。大の音楽好きのヴェスターホルト氏が私のうしろの席にいた。

この演奏会でモーツァルトが弾いた自作の協奏曲は、クラヴィア協奏曲第19番へ長調 KV 459と第26番二長調 KV 537であることは、モーツァルトの死後、1794年にオッフェンバックのヨーハン・アンドレが出版したクラヴィア協奏曲の表紙に記されている。大宮 眞琴は、「演奏された順序はあきらかにK537が先で、旧作のK459は第2部の最初に演奏された。」と断言しているが、「戴冠式協奏曲」として親しまれている二長調 KV 537の協奏曲が第一部で演奏されたのか第二部で演奏されたのか確固たる証拠はない。私は、管楽器が控えめで室内楽としても演奏可能な二長調 KV 537の方がレントハイム＝シュタインフルト伯爵を満足させなかった可能性は大いにあると考える。興味深いことに「モーツァルト氏の即興による幻想曲」を楽譜なしで弾いたモーツァルトの即興演奏はまったく魅力的であったと書いていることから、2つの協奏曲は楽譜を見ながら演奏したのであろう。また、この即興演奏は、未完成のまま残されたが大変美しい幻想曲二短調 KV 397 (385g)あるいは、幻想曲八短調 KV 457が演奏されたのであろうか。その後、彼はマインツに立ち寄り、10月20日には選帝侯居城にあるアカデミー・ザールで演奏会を行い、21日にも宮廷における大饗宴でクラヴィア演奏を行って「最高最大の」拍手喝采を得た。しかし、10月17日付のヴィーンで待つ妻に宛てた手紙の追伸に次のように書かれる。

追伸 この前の頁を書いていたら、涙がぼろぼろと紙の上に落ちてきたのだ。でもいまは、陽気だぞ — さあ、つかまえろ — 驚くほどたくさんキスが飛びまわっている。……こいつめ！……ぼくには見えるぞ、いるいる沢山……はっ！ はあ！……3つつかまえたぞ — こいつは豪華だ！

失意のうちにフランクフルト旅行を終えヴィーンに戻ったモーツァルトは、最後の年を迎えるのであった。1791年9月6日、オーストリア皇帝の地位を継承したレーオポルト2世は、今度はボヘミア王としての戴冠式をプラハの聖ヴィートゥス大聖堂で執り行うことになった。戴冠式用祝典オペラの作曲は、当初、宮廷楽長のサリエリに委嘱する予定であったが、断られたため、モーツァルトに900グルデン（230万円）で委嘱することになった。7月下旬のことである。モーツァルトは「魔笛」KV 620を作曲中であり、見知らぬ使者から「死者のためのミサ曲」の注文も受けていたが、この名誉で利益が得られる仕事を断るわけにはいかなかった。ヴィーンからプラハへ向かう馬車の中でもこの祝典オペラの作曲は続けられた。8月26日、サリエリが20人の音楽家を連れて、28日にはモーツァルトが妻コンスタンツェとアシスタントのフランツ・クサヴァー・ジュスマイヤーと共にプラハに到着。翌日、レーオポルト2世が、その翌日には皇后マリア・ルイーゼが到着した。9月1日には宮廷人たちの晩餐会でモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」を管楽アンサンブルに編曲した「ハルモニウムジーク」が食卓音楽として演奏された。2日には、祝祭公演の一環として「ドン・ジョヴァンニ」が上演され、満員の盛況であった。5日、モーツァルトは、ジュスマイヤーに手伝ってもらいながら戴冠式用祝典オペラ「ティート帝の慈悲」を完成させ、「自作全作品目録」に記入する。

9月5日。 — 9月6日、プラハにて上演。

ティート帝の慈悲。レーオポルト2世皇帝陛下の戴冠式のための2幕のオペラ・セリア。 — ザクセン選帝侯殿下宮廷詩人マッツォラ氏によって真のオペラに編作。 — 女優たち — マルケッティ・ファントツツィ夫人、アントニーニ夫人。 — 俳優たち — ベディーニ氏、カローナ・ペリーニ夫人（男役）、パリオニ氏、カンピ氏 — それに合唱。 — 24曲。

9月6日火曜日、レーオポルト2世のボヘミア王としての戴冠式が聖ヴィートゥス大聖堂で行われた。典礼にはサリエリの指揮でモーツァルトのミサ曲が用いられた。彼はこのとき、モーツァルトが作曲したミサ・プレヴィス 八長調 KV 258、ミサ曲八長調「戴冠式ミサ」KV 317、ミサ曲八長調 KV 337の3曲を持参していたので、そのいずれかが演奏されたと考えられている。その時に使用された「戴冠式ミサ」KV 317のパート譜は残っており、またKV 337の総譜にはサリエリが書き込んだ演奏上の解釈や注意点が認められる。そのほか、「エジプト王ターモス」KV 345 (336a)の最初の合唱「太陽よ、すでに汝に道をゆずるは」を編曲したモテット「スプレンデーテ・テ・デーウス」KV Anh. 121が演奏された。その日の夜、モーツァルトの指揮で「ティート帝の慈悲」が初演された。初演に立ち会った皇后マリア・ルイーゼは「お粗末な出来栄えのドイツ物」という酷評を残している。宮廷に仕えていたツィンツェンドルフ伯爵は、日誌に次のように記した。

5時に旧市の劇場に行く。…（中略）…皇帝御一行は7時半過ぎによやく御到着。供応にあずかったのは「ティート帝の慈悲」というまことに退屈きわる芝居であった。…（中略）…〔ヴィテリア役の〕マルケッティはかなり上手で皇帝は、彼女に熱狂した。

プラハ戴冠式記録には、次のように記載されている。

戴冠式当日の6日、諸身分会が陛下を讃えるために、新たに作曲されたオペラを上演した。台本はメタスタージョのイタリア語によって

いるが、ドレーズデンの劇作家マツォラ氏によって改作されている。作曲は有名なモーツァルト氏。彼は余り時間がなかったにも拘らず、しかも最後の部分を完成させる時には病気になったにも拘らず、その作品で大きな名誉を得た。

しかし、その後行われた公演に観客は少なく、「ティート帝の慈悲」の興行主ドメニコ・ガルダゾーニは、7月8日にオペラの契約をしたボヘミアの諸身分会に対して損害賠償を求めたが、ガルダゾーニが補償金として得たのは15ドゥカーテンだけであった。1808年に書かれたプラーハ・クラインザイト・ギムナージウムの教授であったフランツ・ニーメチェックの「ヴォルフガング・ゴットリープ・モーツァルトの生涯 オリジナル資料に基づく」に、プラーハ滞在中のモーツァルトの様子が描かれている。

モーツァルトは、すでにプラーハで体調をくずし、絶えず薬を服用していた。顔色は悪く、容貌も淋しげであったが、友人たちと一緒にいるときは、彼の陽気なユーモアがそれでもなお楽しげな冗談となって溢れ出た。友人たちに別れを告げる時、彼はひどく悲しげで、涙を流していた。間近かに迫った死への予感が、憂鬱な気分をもたらしたようだった—というのは、すでにこの時、ほどなくして彼の命を奪う病の萌芽が、彼の中に潜んでいたからである。

オペラ・セリア「ティート帝の慈悲」 KV 621

【序曲】

ローマ皇帝ティートは、ユダヤの女王ベレニーチェを愛している。先帝の娘ヴィテリアは自分自身が皇位を継ぐべきものと思っている。そこで、自分に想いを寄せているセストに、父親の仇を取るためと称して皇帝を暗殺するようそそのかす。セストは皇帝ティートの親友ではあるが盲目的に愛しているヴィテリアに逆らえない。

【第1曲 二重唱（セスト、ヴィテリア）へ長調】

「好きなように指示をすれば私は、そのとおりやります。あなたは私の運命だ。あなたのためなら何でもやります。」

皇帝が、ベレニーチェとの結婚をあきらめたと聞いて、ヴィテリアはセストに暗殺計画を延期するよう命じる。

【第2曲 アリア（ヴィテリア）ト長調】

「私を喜ばせたいなら、疑わないでください。盲目の愛は信頼を強要し、失望をおそれるものは欺瞞にはしりたがる。」

【第4曲 行進曲変ホ長調】

元老院の議員や属州の使者たちが集まっているところに、盛装した皇帝ティートが近衛兵を従えて登場する。

セストの友人アンニオがセストの妹セルヴィアに結婚を申し入れていたが、皇帝はセルヴィアを妃に迎えると宣言する。失意のセルヴィアは意を決して皇帝にアンニオを愛していることを告白する。寛大な皇帝はこれを許す。事情を知らないヴィテリアは、セルヴィアが皇帝の妃になると聞いて嫉妬の念を起す。

【第9曲 アリア（セスト）変ロ長調】

セストに再び皇帝暗殺を命じる。「では行きましょう。これでまたわれらに平和がくるでしょう。」

プブリオとアンニオが、ヴィテリアの元に彼女が皇帝の妃に選ばれたことを報告に来る。ヴィテリアは当惑し、混乱するが、暗殺計画を止めるには遅すぎた。セストは親友への裏切行為に戦慄を感じながら宮殿に火を放つ。しかし、皇帝は難を逃れ、アンニオはセストに皇帝が生きていることを知らせる。ヴィテリアはセストに逃げるよう命じるが、プブリオと近衛兵に逮捕されてしまう。ヴィテリアをかばって真相を話すことができないセストに、皇帝ティートは死刑執行の署名をためらってしまう。ヴィテリアもセストを裏切って独り死なせるわけにはいかない。彼女は、陰謀の責任は自分ひとりがあると皇帝に告白する。慈悲深い皇帝ティートは「悔い改めた心こそ、変わらない忠誠よりも尊いもの」と二人を許して幕は下りる。

ピアノと管弦楽のための協奏曲第26番二長調「戴冠式協奏曲」KV 537

1788年2月24日、自作全作品目録に「戴冠式協奏曲」として親しまれている協奏曲が記入される。

クラヴィーア協奏曲二長調。 — ヴァイオリン2、ヴィオラとバス。

フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2とティンパニ アド・リビトゥム。

このアド・リビトゥム（任意）は、楽器の加除は演奏者に自由に任せると言う意味であるが、トランペットとティンパニだけにかかるのか、管打楽器全体にかかるのか議論されている。アド・リビトゥムと記載されたクラヴィーア協奏曲はこの曲以外に4曲残されている。それは、第12番 イ長調 KV 414 (385p)、第11番 ヘ長調 KV 413 (387a)、第13番 ハ長調 KV 415 (387b)、第14番 変ホ長調 KV 449である。第11番～第13番の三曲については、1783年1月15日のヴィーン新聞に「楽長モーツァルト氏は尊敬すべき聴衆の方々に新たに作曲されたクラヴィーア協奏曲3曲の出版を発表した。この3曲の協奏曲は管楽器を含む大管弦楽団でも、単なる四重奏、即ちヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ1とでも演奏可能であり、本年4月初めに出版される。」とある。第14番は自作全作品目録の最初に記載された曲で、「1784年2月9日 クラヴィーア協奏曲。伴奏。 ヴァイオリン2、ヴィオラ、バス。 — (オーボエ2、ホルン2、アド・リビトゥム。）」とオーボエとホルンがアド・リビトゥムであることが明確に括弧で示されている。さらに、この協奏曲をザルツブルクに住む父レーオポルトの元に送る際に付けた手紙に、「変ホ長調の曲は、管楽器を除いて、弦四部でも演奏できます。」と書いている。

クラヴィーア協奏曲 第26番 二長調 KV 537の自筆譜は12段の五線紙で、最上段から2本のトランペット、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、フルート、2本のオーボエ、2本のファゴット、2本のホルン、クラヴィーア右手、クラヴィーア左手、バスとあって、最下段はティンパニとなっている。その後、第3楽章の10頁すなわち第173小節目から突然、上から順に第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、フルート、2本のオーボエ、2本のファゴット、2本のホルン、2本のトランペット、ティンパニ、クラヴィーア2段、バスに変更されている。



「戴冠式協奏曲」第1楽章の自筆譜 1頁



「戴冠式協奏曲」第3楽章の自筆譜 10頁

アラン・タイソンによると、「戴冠式協奏曲」の自筆譜には6種類の五線紙が使用されており、1787年5月16日に完成した弦楽五重奏曲 ト短調 KV 516で使用された五線紙も含まれている。また、前田育徳会尊経閣文庫が所蔵しているモーツァルト自筆のスケッチには、「戴冠式協奏曲」の第2楽章と弦楽五重奏曲 KV 516のフィナーレが含まれていることから、モーツァルトは1787年の春には「戴冠式協奏曲」の作曲を開始していたと考えられる。五線紙の使い方から見て当初、トランペットとティンパニを含まない楽器編成で作曲を始め、またインクの濃さからクラヴィーアと弦楽器の骨格が先に書かれたと推定されている。1787年5月28日の父レーオポルトの死、10月28日にプラハで初演された歌劇「ドン・ジョヴァンニ」KV 527の製作、公演のために作曲は中断され、1788年になって再開された。モーツァルトは第3楽章の途中でトランペットとティンパニを追加することを思い立ち、第1楽章に戻って空欄になっていた最上段と最下段にトランペットとティンパニを書き入れて曲を完成させた。このようにトランペットとティンパニは後から追加されているが、彼が1784年から86年にかけて作曲した一連のクラヴィーア協奏曲のように管楽器に本質的な要素がないことから、また、ヴァイオリン2、ヴィオラとバスにアンダーラインが引かれていることから、アド・リビトゥムの解釈は、管打楽器全体に及ぶと考える説が有力である。

この「戴冠式協奏曲」の演奏上の問題として、モーツァルトは独奏パートの左手をほとんど書き残していないことがあげられる。特に第2楽章はまったく記載がない。彼は、自分自身で演奏するためにこの曲を作曲したので、音符を書き入れる必要がなかった、あるいは、特に第2楽章は即興的な演奏をするためにメモのみで十分だったと考えられている。一般的には後述するように1789年4月14日、ドレスデンで初演されたとされているが、1788年2月24日に完成した協奏曲をその日まで演奏しなかったとは考えにくい。独奏パートが不完全のままになっていることから考えて、2月24日頃に催された何かの演奏会のために大急ぎで仕上げたのではないだろうか。モーツァルトは、1784年の四旬節（復活祭の46日前の水曜日から復活祭の前日までの期間）に行ったサロンコンサートでは174名もの予約があったことを、父への手紙で伝えている。実に2月26日から4月3日までの間に22回の演奏会を行っている。モーツァルトは1784年から1786年の四旬節の演奏会のために毎年3~4曲の協奏曲を作曲していた。この「戴冠式協奏曲」も、たしかに演奏された記録は残っていないが、四旬節の演奏会で演奏された可能性はあると思う。ちなみに、今日使われている楽譜は、1794年にオッフェンバックのヨーハン・アンドレから出版された楽譜に基づいている。これは、ヨーハン・アンドレ自身が、モーツァルトが空白のままにしておいた部分を補筆したものと考えられている。また自筆譜に書かれたテンポ表示も第1楽章を除いてモーツァルト自身のものではないことが分かっている。

1778年11月14日、ウィーンの東80kmの所にあるプレスブルク、現在のスロヴァキアの首都、ブラスティアヴァに生まれたヨハン・ネーポムク・フンメルは、1786年頃から1788年12月までの約2年間、モーツァルト家に住み込みで教えを受けていた。その時期はちょうどモーツァルトが、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」KV 525、歌劇「ドン・ジョヴァンニ」KV 527、クラヴィア協奏曲第26番「戴冠式」KV 537、交響曲第39番 KV 543、交響曲第40番 KV 550、交響曲第41番「ジュピター」KV 551など数々の傑作を作曲した時期と重なる。1829年7月27日、ヴィンセント、メアリー・ノヴェロ夫妻が行ったピアノメーカー・シュタイン社を経営していたアンドレアス、ナネット・シュトライヒャー夫妻へのインタビューにフンメルとモーツァルトの親密な師弟関係が出てくる。ナネット・シュトライヒャー夫人はモーツァルトの父レーオポルトの故郷アウグスブルクのピアノ・オルガン製作者シュタインの娘でモーツァルトやベートーヴェンの弟子であった。アンドレアス・シュトライヒャーはクラヴィアの教師でモーツァルトの四男フランツ・クサヴァーに最初にクラヴィアを教えた人である。



ナネット・シュトライヒャー (1769-1833)

フンメルは5年間モーツァルトの家に住み込みで勉強しました。よくモーツァルトが家に帰って来て、何か一緒に弾こうと思った時、眠っているフンメルを叩き起こして弾かせることになったそうです。少年が眠い目をこすって気乗りしない様子だと、先生は水を一杯飲ませて、「さあ、いい子だからね」となだめ、それから二人で弾くのでした。

5年間住み込んだというのはシュトライヒャーの思い違いである。10歳になったフンメルは1788年末から4年間に渡り、父ヨハネスと共に、モーツァルト親子がかつてそうであったように、ヨーロッパ各地を旅し演奏会を行った。プラハ、ドレスデンを経てベルリンに滞在、その後、ハノーヴァー、コペンハーゲンに行き、1790年の春には、ハンブルクからエディンバラに渡っている。その後ダラム、ケンブリッジを経て秋に到着したロンドンに2年間滞在した。1789年5月21日付のベルリンのシュペーナー新聞には次の広告が出ている。

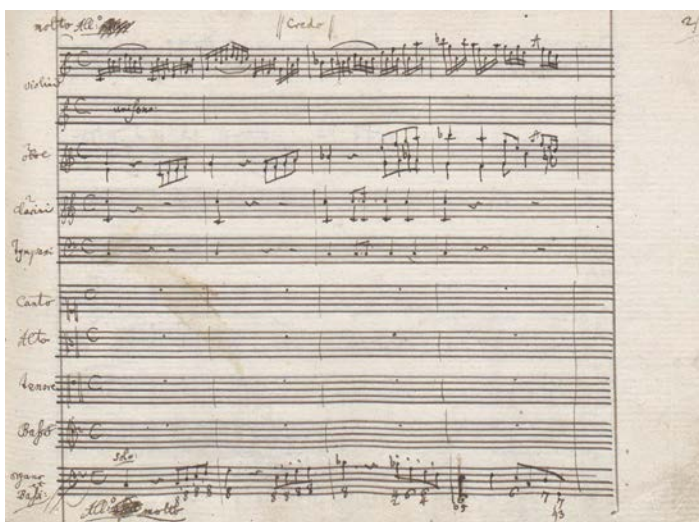
5月23日、日曜日の夕、コルシカ楽堂においてコンサートが行われるが、満員の盛況となろう。ウィーンからの10歳の名手フンメル氏がフォルテピアノで演奏する。彼は著名なモーツァルト氏の弟子で、熟練さ、確実さ、それに繊細さにおいて、あらゆる期待を凌駕している。

モーツァルトは、彼が編曲したヘンデルの『メサイア』をヨハン・フォン・エステルハーゼ伯爵邸で指揮をした翌日、1789年4月8日にカール・リヒノフスキー公爵とともにウィーンを発ち、プラハを経由して4月12日、ドレスデンに到着した。4月14日午後5時半からに宮廷で選帝侯フリードリヒ・アウグスト三世の妃アマリエのために御前演奏会を行い、「戴冠式協奏曲」を演奏した。その後、ライプツィヒを経由して5月19日にベルリンに到着している。おそらくこの最愛の弟子と再会していたことであろう。先に述べたシュトライヒャーの回想からもモーツァルトはフンメルに特別な思いで接していたであろうことは容易に想像がつく。フンメルもモーツァルトの後期交響曲やクラヴィア協奏曲を室内楽に編曲したり、伝記を編纂するなど、終生師匠を敬愛していた。フンメルが1835年3月に編曲した「戴冠式協奏曲」のピ

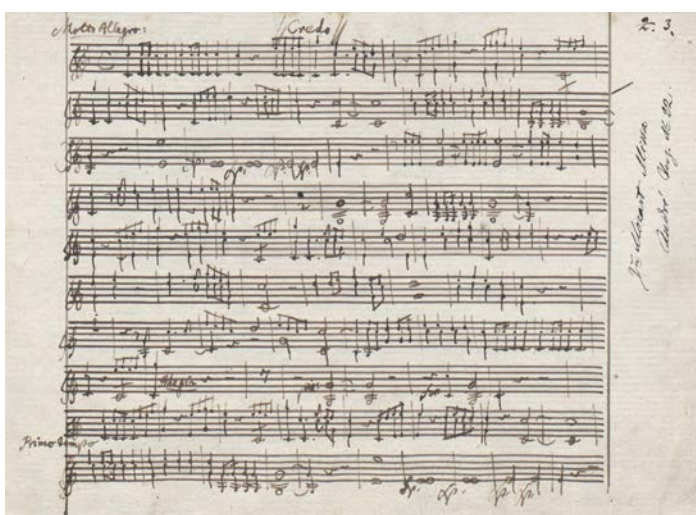
アノ独奏版およびフルート、ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための四重奏版「クラヴィア協奏曲第5番」は当時の演奏スタイルを知ることができる貴重な資料である。ただし、モーツァルトが使用していたフォルテピアノの音域は f^3-F_1 であったので、オリジナルのクラヴィア協奏曲はその音域で作曲されているのに対して、フンメルは1オクターブ高い f^4 までを使用している。ちょうどベートーヴェンがピアノ協奏曲第5番「皇帝」やピアノソナタ第26番「告別」を作曲した年にあたる1809年にナネット・シュトライヒャーが開発した6オクターヴ (f^4-F_1) の新型フォルテピアノの音域と一致する。ベートーヴェンを驚喜させたこの新型フォルテピアノは、彼の意図を実現させてくれる楽器だったのである。従って、モーツァルトが空白のまま残した部分を新型フォルテピアノで編曲されたフンメル版でそのまま埋めるわけにはいかないが、フンメルによる編曲はモーツァルトが意図したことを探るためには大いに研究されるべき資料であると考えられる。

ミサ曲第15番八長調「戴冠式ミサ」 KV 317

1779年1月17日、モーツァルトは、神聖ローマ帝国のザルツブルク大司教ヒエローニムス・コロレドから宮廷オルガン奏者に任命された。逝去したカイエタン・アードゥルガツァーの後任であった。辞令には「大聖堂ならびに宮廷、さらに唱歌隊員養成所において課せられた職務をたゆまぬ勤勉さをもって不平なく果たし、かつ、可能なかぎり宮廷ならびに教会に自作の曲を供給すること。」とある。これまで第二コンツェルトマイスターとして年棒150フロリンしか与えられていなかったが、3倍の給与（約115万円）を受けることになったのである。モーツァルトは、早速ミサ曲の作曲に取り掛かる。自筆譜には1779年3月23日の日付があるので、4月4日から4月5日にかけて行われた復活祭の式典で司教座聖堂（ザルツブルク大聖堂）にて演奏されたのではないかと考えられている。しかし、モーツァルトの姉ナンネルルの日記によると、「4日。中心の聖壇でミサがありました。」「5日。大聖堂でミサ。」とあるだけで、弟の曲が演奏されたとは書かれていない。3月30日の日記には「それからリタニアに行きましたが、これは弟のものでした。」とある。もっともこの記述はモーツァルトの手によるものではないかと考えられているが、また、大聖堂のオーケストラには通常ホルンがないのにこの曲ではそれが用いられている。かつてはザルツブルク郊外の巡礼教会マリア・プラインで、祭壇に飾られた聖母マリア戴冠像のために作曲されたことから「戴冠式ミサ」の名称がつけられた説もあったが、実際に戴冠の儀式が行なわれたのは6月27日であり、作曲された日からかなり後であることからこの説は否定されている。「戴冠式ミサ」の自筆譜は、116頁からなる10段の五線紙で、上から順に第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、2本のオーボエ、2本のクラリーノ（トランペット）、ティンパコとあり、6段目から9段目が合唱で最下段がオルガンとバスとなっている。



「戴冠式ミサ」の自筆譜 41 頁「クレード」総譜



「戴冠式ミサ」の自筆譜 111 頁「クレード」ホルン譜

116頁ある自筆譜の五線紙はアラン・タイソンの透かし模様の研究によると1種類しか使われていないことが判明している。ホルンの楽譜は巻末に書かれている。初演後、ホルンのパートを後から追加したのか、同時に作曲したが、五線紙が10段しかなかったので単に別紙に書いただけなのか分かっていない。ただ、ホルンのパートは総譜作成の後に書かれたことは間違いなさそうである。「クレード」のテンポはホルンのパートには、Molto Allegroと記載されている。一方、総譜の上部に記載されたテンポ表示はAll^o: assaiのassaiを消して

molto All^oと訂正しているからである。総譜の下部に記載されたテンポも、All^o: assaiをAll^o moltoに訂正されている。Allegro molto (molto Allegro)とAllegro assaiのテンポの違いは、ヨハン・ネーボムク・フンメルが編曲したモーツァルトの交響曲第40番ト短調のメトロノーム記号が雄弁に物語っている。フンメルの編曲版では、第1楽章Allegro moltoは二分音符 = 108、フィナーレのAllegro assaiは二分音符 = 152の指定になっていることから、Allegro assaiの方がAllegro moltoより速いテンポであったことがわかる。当初、かなり早めのテンポで作曲したが、早すぎたので後で少し遅めに修正したのかもしれない。1776年5月に作曲されたミサ・ロンガ 八長調 KV 262 (246a)にもホルンが用いられている。そのため、カルル・ド・ニは、このミサ曲は司教座聖堂ではなく大修道院付属聖ペテロ教会のために作曲されたのではないかと推定している。「戴冠式ミサ」もそうだったのかもしれない。モーツァルトがポーロニアのジョヴァンニ・バッティスタ・マルティーニ師に宛てた1776年9月4日付けの手紙には次のような記載がある。

当地には他に2人のまことにすぐれた対位法作家、すなわちハイドン氏ならびにアードゥルガッサー氏がおります。私の父は大司教聖堂の楽長であります。その父が私の思うままに教会用の作品を書く機会を与えてくれるのであります。加えて、父はすでに36年も当宮廷に仕えておまして、この大司教が年輩者を理解することもできず、また、望みもしないのを知っており、またそれを気にかけてもせず、それでも自分の好む研究の文献に没頭しております。私どもの教会音楽はイタリアのそれとは大いに異なっているばかりか、いっそうそれがつよまり、キリエ、グローリア、クレード、ソナータ・アレピストラ、オッフエルトリオ、あるいはモテット、サンクトゥス、それにアニュス・デイのすべてを含むミサ、さらにもっとも荘厳なミサですら、大司教御自身がじきじきに取りおこないますときには、一番長くてさえ45分以上にわたって続けるはならないのです。この種の作曲には特別な勉強が必要です。それにあらゆる楽器 — 軍隊用トランペット、ティンパニ等を伴ったミサ曲であることが要求されます。

ミサは、開祭の儀、ことばの典礼、感謝の典礼、交わりの儀、閉祭の儀で構成される。開祭の儀は、イントロイトゥス（入祭唱）で始まり、入祭の挨拶とコンフィテオール（告白の祈り）の後、キリエ（あわれみの賛歌）、グローリア（栄光の賛歌）が歌われ、コレクタ（集祷文）が唱えられる。ことばの典礼では、エピストラ（使徒書簡朗読）、グラドゥアーレ（昇階唱）、アレヤ唱またはトラクトゥス（詠唱）、セクエンツィア（続唱）が歌われ、エヴァンジェリウム（福音書朗読）、クレード（信仰宣言）と続く。使徒書簡のためのソナータが、書簡朗読の前、グラドゥアーレが歌われる個所、あるいはざっくりと書簡朗読と福音書朗読の間など諸説あり、どこで演奏されたのかはよく分かっていない。少なくとも、グローリアとクレードの間であり、モーツァルトがマルティーニ師に宛てた手紙の順ではないことは確かである。書簡ソナータ 八長調 KV 329 (317a)が「戴冠式ミサ」と同じ楽器編成であることから、この曲が「戴冠式ミサ」で使用されたと考えられている。アラン・タイソンによる五線紙の透かし模様の研究によると両者とも同じ種類の五線紙が使われており、この仮説を裏付ける。感謝の典礼は、オッフエルトリウム（奉献唱）で始まり、セクレタ（密誦）、プレファツィオ（序誦）が唱えられ、サンクトゥス（感謝の賛歌）が歌われ、カノン（奉献文）を祈願する。交わりの儀では、パーテル・ノステル（主の祈り）を唱え、アニュス・デイ（「神の子羊」、平和の賛歌）が歌われる。その後、コムニオ（聖体拝領唱）が歌われて、イテ・ミサ・エスト（解散の宣言）となる。これを全て45分で収めるためには、作曲者の持ち時間は限られてしまう。だから、モーツァルトは特別な勉強が必要であると言ったのであろう。

ミサ曲 KV 275 (272b)やミサ曲 KV 337では初演時のパート譜が残されている。独唱各1部と合唱各声部2部、第1ヴァイオリン2部、第2ヴァイオリン2部である。一番下段に記載されている通奏低音の指定は、Organo et Baßiとなっている。これは「グローリア」で明確になる。通奏低音は2声に分かれ上部にはVioloncello、下部にはOrg: et Contrabaßiとの記載があり、また、「クレード」の第97小節目からは、上部にVioloncello、下部にはFagotti coi Contrabaßiの指定となっている。モーツァルトが指定したチェロは、Violoncelloと単数形であるが、新モーツァルト全集ではVioloncelliと何故か複数形で印刷されている。おそらく、ザルツブルクでのミサの折には、8名の合唱にヴァイオリン3~4本、通奏低音としてチェロ1本とファゴット2本、コントラバス2本、そしてオルガン2台が使用されたものと思われる。ではフランクフルトやブラーハでの演奏ではどうだったのであろうか。ドナウエッセンゲンのフルステンベルク宮廷図書館やパッサウの聖シュテファン大聖堂に保存されている1800年頃のミサ曲 KV 337のパート譜のセットにはサリエーリが追加したヴィオラの楽譜が残されていることから、イタリアの慣習に即して、通奏低音にヴィオラが追加された可能性も考えられる。（2015年12月24日）

ミサ曲については、東京大学分子細胞生物学研究所の伊藤 啓先生による優れた解説「ラテン語宗教曲、単語の意味と日本語訳 http://jfly.iam.u-tokyo.ac.jp/music/musica_sacra.pdf」があるので、ここに転載させていただきます。

ミサとは、カトリック・キリスト教の礼拝のことである。キリストがユダヤ人によって死刑にするために捕らえられる直前、キリストは弟子たちと最後の晩餐を行なった。そこでキリストは、パンとぶどう酒を皆に与えて、「これは世の罪を負って十字架につけられ、神にあがないをするための私の血と肉である。これを飲み、食べることで、私を記念するように」と述べた。この最後の晩餐を再現し、神への信仰を確認するのがミサである。

元来ユダヤ教では、安息日である土曜日に集まって、聖書(旧約聖書)を読む習慣があった。初期キリスト教ではこれに加えて、キリストが復活した日である日曜日にも集まって、皆とともに食事をする事で信者の団結を確認していた。やがてこの二つの集会はまとめられ、日曜日に集まってともに聖書を読み、食事をするようになった。食事はやがて簡略化され、象徴としてパンを分けあって食べるのみになった。これが現在のミサの起こりである。従ってミサは、前半の聖書を読む部分(ことばの典礼)と、後半のパンを分けあう部分(交わりの儀)の、二つの主要部分からなる。

現在演奏されるほとんどのミサ曲は、トレント、パチカンの2つの公会議の間の、400年間のルブリカミサの時代に作られたものである。従って作曲者を問わず、歌詞はすべて共通で、ラテン語で書かれている。

ミサで唱えられる文句は二つに分けられ、

毎回共通の部分	: 通常文
ミサの行なわれる日によって異なる部分	: 固有文

と呼ばれている。ミサの言葉は古くから「歌うように唱える」ものとされ、通常文、固有文それぞれについて、単旋律(ユニゾン)の歌が作られた。これがグレゴリオ聖歌である。これに加えて、12世紀頃からは複旋律(合唱)の歌も作られるようになった。

毎回のミサで唱えられる通常文のうち、会衆が唱える以下の5つ、すなわち

キリエ	: 憐れみの賛歌
グローリア	: 栄光の賛歌
クレド	: 信仰宣言
サンクトゥス／ベネディクトゥス	: 感謝の賛歌
アニュス・デイ	: 平和の賛歌

は、ミサの中でも特に重要な位置を占めるので、この5ヶ所を選んで複旋律の音楽が作曲されるようになった。これがいわゆる「ミサ曲」で、14世紀末、現在のベルギーを中心とするフランドル楽派に属するギョーム・ド・マショーらの頃が最初とされている。以来今日まで、ルネサンス、バロック、古典、ロマン、...と音楽の流れの変わるとつれて、そのときどきの形式で、まったく違った雰囲気のみサ曲が、作られ続けてきた。長いものも短いものもあるが、短い曲では2つの言葉を違うパートが同時に歌うなどして時間を節約し、長い曲では同じ言葉を何度も繰り返して時間を稼いでいる。

これらのミサ曲を使って実際にミサを行なう場合、作曲されているのは通常文の中の5ヶ所だけであるから、ほかの通常文や、固有文の部分には、グレゴリオ聖歌や、その他特定の歌詞にあわせて作られた宗教曲が用いられた。また一部の大きな教会では、聖書朗読の前などに器楽曲が演奏されたこともある。いずれにせよ、ミサ曲として作曲された音楽だけでミサが行なわれることはない。

カトリックでもプロテスタントでも、一時は音楽的美しさを追求するあまり、本来会衆が全員で唱えるべき言葉のほとんどの部分を訓練された聖歌隊が歌い、会衆はただ聴いているだけという状態に近くなってしまった。これではミサが会衆から遊離してしまうという反省から、近年は聖歌隊のみに頼らず、平易な音楽を用いてなるべく会衆全員で歌う(唱える)ことがふつうになった。そのためもあって現在では、オーケストラと合唱を備えたミサ曲を使ってミサを行なう機会はほとんどない。

以下には、1962～65年の第2回パチカン公会議より前の、ルブリカミサ時代のミサの内容を、順を追ってまとめた。その流れの中で、ミサ曲として作曲される各部分について、ラテン語の全文と全体の対訳を記した。訳は現在礼拝で用いられている言葉を基本にしたが、逐語訳に近づけるために一部変更を加えたので、注意されたい。

【開祭の儀】

ミサの開始を告げる部分。

まず司祭や侍者の入場にとりなって、会衆が入祭唱(Introitus・固有文)を唱える。ついで司祭と会衆のかけあいで入祭の挨拶

(Salutatio・通常文)が行なわれたのち、みなで改心の祈り(Confiteor・通常文)を唱える。改心の祈りに続いて、会衆があわれみの賛歌(Kyrie・通常文)と、栄光の賛歌(Gloria・通常文)を唱える。

最後に司祭が集会祈願(Collecta・固有文)を行ない、その日のミサの目的を唱える。

Kyrie(主よ) **あわれみの賛歌**

三位一体を象徴して、神と、キリストと、聖霊に、それぞれ3回づつ憐れみを乞う。東方教会(現在の Uギリシャ正教)の祈りが転用されたので、この部分のみラテン語でなくギリシャ語である。

KYRIE

Kyrie eleison.
Christe eleison.
Kyrie eleison.

キリエ (主よ)

主よ、あわれんで下さい。
キリストよ、あわれんで下さい。
主よ、あわれんで下さい。

Gloria(栄光) **栄光の賛歌**

キリエ(あわれみの賛歌)に続けて、会衆によって唱えられる。4世紀にはすでに原形があり、6世紀始めから広く用いられている。クリスマス、復活祭の前と、死者のためのミサでは、省略される。

前半は神への賛美と感謝からなり、後半より古く成立したといわれる。後半はキリストへの呼びかけで、賛美をし、憐れみを乞う。最後の一節で、聖霊にも言及する。

最初の一行は先唱者がグレゴリア聖歌の旋律を用いて一人で唱え、会衆は二行目から唱和する習慣だったので、古い曲には一行目を欠き、二行目から作曲されているものも多い。

GLORIA

Gloria in excelsis Deo,
et in terra pax hominibus bonae voluntatis.

※キリスト誕生の時に羊飼いの前で天使が神を賛美して言った言葉。(新約:ルカ2章14節)

Laudamus te, benedicimus te,
adoramus te, glorificamus te.
Gratias agimus tibi propter magnam gloriam tuam.

グローリア (栄光)

いと高きところには神に栄光、
そして地上には善意の人々に平和。

私たちは、汝をほめ、汝を讃え
汝を拝み、汝をあがめ、
汝の大いなる栄光のゆえに汝に感謝し奉る。

Domine Deus, Rex caelestis, Deus Pater omnipotens.

神なる主、天の主、全能の父なる神よ。

Domine Fili unigenite, Jesu Christe, altissime.
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.

主なる御ひとり子、至高のイエス・キリストよ。
神なる主、神の子羊、父のみ子よ。

Qui tollis peccata mundi, miserere nobis.
Qui tollis peccata mundi,
suscipe deprecationem nostram.
Qui sedes ad dexteram Patris, miserere nobis.

世の罪を除きたもう主よ、私たちをあわれんで下さい。
世の罪を除きたもう主よ、
私たちの願いを聞き入れて下さい。
父の右に座したもう主よ、私たちをあわれんで下さい。

※キリストは復活の後、再び天にのぼり、それ以来神の右側に座している。(新約:マタイ26章64節、マルコ16章19節、ルカ22章69節、使徒行伝1章3〜9節、7章55〜56節)

Quoniam tu solus Sanctus, tu solus Dominus.
tu solus Altissimus, Jesu Christe.

あなたのみが神聖で、あなたのみが王で、
あなたのみがいと高いのだから、イエス・キリストよ。

Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris.

聖霊とともに、父なる神の栄光のうちに、

Amen.

そうでありますように。

【ことばの典礼】

聖書を朗読して、キリストの行跡と教えを思いかえす部分。

現在は古いミサの形式を復元して、最初に朗読者によってキリストの行ないに関連する旧約聖書朗読が行なわれ、ついでそれに対応する内容の歌を、旧約聖書の聖歌集である詩篇から選んで会衆が唱える(答唱詩篇)。ついで新約聖書後半にある、キリストの弟子が各地の教会に宛てた手紙の一節が、朗読者によって読まれる(書簡朗読)。

ミサ曲の作曲されたルブリカミサ時代には旧約聖書朗読は行なわれておらず、最初に書簡朗読 (Lectio libri apostoli・固有文)

が行なわれ(時によってかわりに旧約聖書が読まれることもあったらしい)、次に会衆によって昇階唱 (Graduale・固有文)が唱えられた。ついで会衆によって、次に読まれる福音書を歓迎して、歓喜の歌であるアレルヤ唱(Alleluia・固有文)が唱えられる。キリストの処刑記念日の前後や死者のためのミサの際は、歓喜の歌のかわりに悲しみの歌である詠唱(Tractus・固有文)が唱えられる。死者のためのミサなど一部のミサでは、アレルヤまたは詠唱に続いて、続唱(Sequentia・固有文)が唱えられる。

司祭と会衆のかけあいで挨拶(Salutatio・通常文)を歌いかわし、福音書への心構えを新たにしたのち、いよいよ助祭 (ミサのなかで司祭の補助をする聖職者) によって福音書の朗読 (Lectio evangelii・固有文) が行なわれ、新約聖書前半にある、キリストの伝記の一節が読まれる。朗読箇所は、1年間でキリストの行跡を一巡するよう選ばれる。朗読の最後に、会衆がキリストを賛美する文句を唱える。

朗読に続いて、司祭によって説教(Homilia・固有文)が行なわれ、朗読内容にちなんだ教えの解説が行なわれる。

書簡朗読、福音書朗読、説教によってキリストの教えを復習した会衆は、信仰宣言(Credo・通常文)を唱え、信仰をもち続けていることを神の前に明らかにする。

最後に、司祭と会衆一同は共同祈願 (Oratio communis) を行ない、集まった信者や地域の共同体、教会全体などに関わるさまざまな祈願をする。

Credo(信じる) **信仰宣言**

【ことばの典礼】において、聖書朗読のあと、司祭による説教に続いて唱えられる。4世紀のニケア公会議で、当時出現し始めていた異端思想に対して正統キリスト教の信ずべき内容を明らかにするために「原ニケア信条」が作られ、これにパレスチナ教会で用いられていた祈りの文句が融合して、現在の形が定まった。長い間、4世紀末のコンスタンチノーブル公会議で原ニケア信条を補筆して今の形になったと考えられていたので、「ニケア・コンスタンチノーブル信条」、また省略して「ニケア信条」とも呼ばれる。ニケア信条は主として東方教会で用いられ、ローマ教会ではほぼ同内容の「使徒信条」が用いられていた。東方教会の信条はやがてゲルマン地域の教会に広まり、11世紀になって初めてローマ教皇のミサにも取り入れられた。

まず神への信仰が確認される。ついで神の子であるキリストへの信仰を確認し、キリストが地上に下って人になったこと(受肉)、十字架につけられたこと(受難)、三日目によみがえったこと(復活)が確認される。三番目に、神の現われである聖霊への信仰を確認し、教会と洗礼の意義の承認、死後の復活の待望を表明する。

死者のためのミサでは省略される。またグローリア同様、最初の一行は先唱者が唱え、会衆は二行目から唱えるので、しばしば二行目から作曲される。

CREDO

Credo in unum Deum,
Patrem omnipotentem,
factorrem caeli et terrae,
visibilium omnium et invisibilium.

Et in unum Dominum,
Jesum Christum, Filium Dei unigenitum,
et ex Patre natum ante omnia saecula.
Deum de Deo, lumen de lumine,
Deum verum de Deo vero,
genitum, non factum,
consubstantialem Patri, per quem omnia facta sunt.

※神はすべてのものを造った(新約:ヨハネ1章3節)。人の祖先であるアダムも、神によって土から造られた。しかしキリストのみは神に造られたのではなく、人間を介して神が生ませた神の息子である。4世紀に起こったアリウス派異端は、キリストはあくまで人であって神ではないと説いた。しかしニケア公会議においてこの考えは否定され、父なる神と子なるキリストは同質のものであることが決議された。

Qui propter nos homines, et propter nostram salutem
descendit de caelis.
Et incarnatus est de Spiritu Sancto
ex Maria Virgine,
et homo factus est.

※マリアへの聖霊降臨は新約:ルカ1章26~38節、キリストの誕生は2章1~7節に詳しい。

Crucifixus etiam pro nobis
sub Pontio Pilato,

クレード(信じる)

私は信じる、唯一の神を、
全能の父を、
天と地と
見える物、見えない物全ての造り主を。

そして(私は信じる)、唯一の主を、
イエス・キリストを、神の御ひとり子を、
そして、よるず世より先に父より生まれたことを。
神よりの神を、光よりの光を、
まことの神よりのまことの神を、
造られたのではなく、生まれたのだということを、
全てを造った父と一体であることを。

主は私たち人類のため、また私たちの救いのために
天よりくだった。
そして聖霊によりて
処女マリアからみ体を受け、
人になられた。

ポンティオ・ピラトのもとでさらに私たちのために
十字架につけられ、

passus et sepultus est.

苦しみを受けられ、葬られた。

※ピラトはローマ占領下のエルサレムの総督で、ユダヤ教指導者に告発されたキリストを死刑に処した。(新約:マタイ27章、マルコ15章、ルカ23章、ヨハネ18章28節~19章)キリストの受難は、人の罪を一身に引き受けてあがなうためであり、キリストの死によって世の罪は除かれた。このことは旧約聖書でも預言されている。(旧約:イザヤ53章、ほか)

Et resurrexit tertia die, secundum Scripturas.

そして聖書に従って三日目によみがえり、

※キリストは何度も、自分が死んで三日目(=翌々日)によみがえると予言し(新約:マタイ12章40節、16章21節、17章23節、20章19節、ほか)、その通り復活した(マタイ28章、マルコ16章、ルカ24章、ヨハネ20章)と新約聖書にある。復活の意義については、新約:コリント人への第一の手紙15章に詳しい。15章4節でパウロは、キリストが「聖書に書いてあるとおり」よみがえったと述べている。この手紙の書かれたときはまだ新約聖書は出来ていなかったため、これは当然旧約聖書を指すはずだが、救い主の復活を明示する預言は旧約聖書にはない。詩篇16篇10節やホセア書6章2節を組み合わせると、復活が示唆されていると考えることが出来なくもない(使徒行伝2章25~36節)。

Et ascendit in caelum, sedet ad dexteram Patris,

天にのぼって、父なる神の右に座られている。

※キリストは復活の後、40日の間地上に留まり、弟子たちに布教に励むよう伝えて、再び天にのぼった。キリストはそれ以来、神の右側に座っている。(新約:マタイ26章64節、マルコ16章19節、ルカ22章69節、使徒行伝1章3~9節、7章55~56節)

et iterum venturus est cum gloria,
judicare vivos et mortuos,
cujus regni non erit finis.

そして栄光のうちに再び、
生ける人々と死せる人々を裁きに来るであろう。
主の国の終わることはないであろう。

※キリストは世の終わりの最後の審判の際、天の雲に乗って再び地上に下るとされている。(旧約:ダニエル7章13節、新約:マタイ24章30節、ルカ21章27節、ほか)

Et in Spiritum sanctum, Dominum et vivificantem,
qui ex Patre Filioque procedit.
Qui cum Patre et Filio simul
adoratur et conglorificatur:
qui locutus est per Prophetas.

そして(私は信じる)、聖なる、主なる、生命を与える霊を。
それは父と子より出る。
父と子とともに
拝まれ、あがめられる。
それはまた預言者によって語られた。

※聖霊は神から人間への働きかけのようなもので、神の息とも表現される。物質である人間に生命を与えたり(旧約:創世記2章7節)、預言者に預言をさせたり(旧約:イザヤ61章1節)するほか、色々な働きが預言書に記されている。キリストは聖霊によってマリアに宿り(新約:マタイ1章18節)、聖霊に導かれて布教を始めた(旧約:イザヤ42章1節、61章1~2節、新約:ルカ4章1節、4章18節、ほか)。キリストが天にのぼった後は聖霊が使徒を導き(使徒行伝2章4節、4章31節、16章6節、ほか)、洗礼を受けた信者に恵みを与える(新約:使徒行伝2章38節、10章45節、ほか)。
※キリストが天に上るまでは、聖霊は父である神のみから発した。しかし天に上ったキリストは、父とともに聖霊を発し、信者を導いていると考えられている。
※キリストは父と子と聖霊を並立して述べている(マタイ28章19節)。この三つは、神という一つの存在の三側面であるとして、ともにあがめられている(「三位一体」の原理)。

Et unam, sanctam, catholicam
et apostolicam Ecclesiam.

そして(私は信じる)、ひとつの、聖なる、公の、
また使徒の教会を。

※公とは、教会が普遍的な存在であることを、使徒とは教会が十二使徒が最初に布教を始めたときから連続と続いている(使徒継承)ことを示す。

Confiteor unum baptisma in remissionem peccatorum. 私は承認する、罪のゆるしのための唯一の洗礼を。

※洗礼(バプテスマ)はキリスト教への信仰を表明する儀式である。洗礼を受けた人は、世の罪を除くために犠牲になったイエス・キリストにあずかることで、罪の許しを得る(新約:ローマ人への手紙6~8章、使徒行伝2章38節、ほか)。キリスト自身が直接洗礼を授けたことはなかったが、弟子には聖霊によって洗礼が授けられ(使徒行伝1章5節、2章4節)、彼らはキリストの指示に従って人々に洗礼を施した(マタイ28章19節、使徒行伝2章41節、8章14~24節、10章47節、19章2~7節、ほか)。なお同じ目的で、キリストより前に「バプテスマのヨハネ」が人々に洗礼を授けているが、(新約:マルコ1章4~9節)キリストの洗礼は聖霊の恵みを伴う点で、ヨハネのものとは比較にならない価値を持つとされている。

Et expecto resurrectionem mortuorum,
et vitam venturi saeculi.

そして待ち望む、死者の復活と
来世の生命を。

Amen.

そうでありますように。

【感謝の典礼】

最後の晩餐でキリストによって配られたパンを記念する「聖体」の準備を行なう部分。

まず会衆によって奉納唱(Offertorium・固有文)が唱えられ、パンとぶどう酒が祭壇に捧げられる。教会への献金も同時に行なわれる。ついで司祭によって密誦(Secreta・固有文)が唱えられる。これは奉納を祈願する祈りで、従来は黙読された。

司祭と会衆が挨拶(Salutatio・通常文)を歌い交わしたのち、司祭は叙誦(Praefatio・固有文)を唱え、神と信者の前で、神の救いの業を述べる。

会衆はこれに応えて、神の神聖さに感動する歌である感謝の賛歌(Sanctus・通常文)を歌う。会衆がこの歌を歌っているあいだに、司祭はミサ典文(聖別祈祷、奉納文:Canon missae・通常文)を黙読する。これは最後の晩餐でのキリストの言葉を元にした祈りで、この祈りによって、捧げられたパンとぶどう酒が「聖体」に変化する(聖変化)。

司祭の黙読が終わるころ、会衆の歌は感謝の賛歌の後半(Benedictus・通常文)に入り、聖変化を受けて主の名のもとに会衆のところへやってくるパンとぶどう酒を歓迎する。

Sanctus(神聖である) **聖なるかな**

【感謝の典礼】において、パンとぶどう酒を捧げた後に唱える。神の神聖さに感動する内容である。サンクトゥスを歌う間に、捧げられたパンとぶどう酒が司祭の祈りで聖体に変えられ(聖変化)、ベネディクトゥスで、パンとぶどう酒の形をとってやって来る主キリスト(あるいは、主の名によってやって来るパンとぶどう酒)を歓迎する。サンクトゥスは6世紀、ベネディクトゥスは7世紀から用いられている。多くの場合ベネディクトゥスの方が小篇成で、地味に作曲される。両曲の末尾のホザンナは共通の主題で作曲されることが多い。

Sanctus

Sanctus, Sanctus,
Sanctus, Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt coeli et terra gloria tua (ejus).

※天使セラフィムが預言者イザヤの前で言った言葉。(旧約:イザヤ書6章3節)同様の賛美を、世の終わりに現われる「四つの生き物」も述べている(新約:黙示録4章8節)

Hosanna in excelsis.

サンクトゥス(神聖である)

聖なるかな、聖なるかな、
聖なるかな、万軍の神なる主は。
天も地は汝の(彼の)栄光に満ちている。

いと高きところに万歳。

Benedictus(祝福された) **ほむべきかな**

Benedictus

Benedictus qui venit in nomine Domini.

※キリストがロバに乗ってエルサレムに入るとき、群衆がシュロの枝を振りながら歓迎して叫んだ言葉。(新約:マタイ21章9節、マルコ11章9節、ルカ19章38節、ヨハネ12章13節。原典となる言葉は、旧約:詩篇118篇26節にある。)またキリストは、彼を受け入れないエルサレムの人々に対し、キリストを受け入れる時に発するべき言葉として、この言葉を伝えている。(新約:マタイ23章39節、ルカ13章35節)

Hosanna in excelsis.

※マタイの記録では、上の言葉の後にこの言葉がつけられている。(マタイ21章9節)

ベネディクトゥス(ほむべきかな)

主の名により来るものは祝福された。

いと高きところに万歳。

【交わりの儀】

聖体を拝領する部分。まず会衆は、キリストが直接弟子に教えた祈りである主の祈り(Pater noster・会衆)を唱える。司祭は祈りを補足して、副文(Embolismus・通常文)を唱える。ついで司祭と会衆は平和の挨拶(Pax・通常文)を交わし、互いに前後左右の人と挨拶をする(欧米では握手をし、日本ではお辞儀をする)。

ついで会衆は平和の賛歌(Agnus Dei・通常文)を唱える。聖体となったパンを「神の小羊」と呼び、人類のためにいけにえとなったキリストに、憐れみを乞う。この間に、司祭は聖体を分ける準備をする。

ついで聖体拝領が行なわれる。会衆は列を作って、司祭から一口づつ聖体(ホスチア)を拝領する。以前は、地域によっては会衆は聖体を拝領せず、司祭のみが信者を代表してひとりで聖体をいただくことも多かった。

聖体拝領を行なう間、あるいは行なった後に、聖体拝領唱(Communio・固有文)が歌われる。最後に司祭によって、拝領を感謝する拝領祈願(Oratio・固有文)が唱えられる。

Agnus Dei(神の小羊) **平和の賛歌**

【交わりの儀】において、聖体拝領の前に唱えられる。キリストの象徴である聖体となったパンを、「バプテスマのヨハネ」がキリストに会ったときに言った言葉にちなんで「神の小羊」と呼び(新約:ヨハネ1章29節)、人類のためにいけにえとなったキリストに永遠の平安を願う。この曲の間に、司祭は聖体を分ける準備をする。7世紀末から使われている詩である。

Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
dona nobis pacem.

※キリストは十字架にかかることで世界の人々の罪をあがない、取り除いた。
※死者のためのミサでは、最後の一節はdona eis requiemに変化する。

アニュス・デイ(神の小羊)

世の罪を除きたもう神の小羊よ、
私たちを憐れんで下さい。
世の罪を除きたもう神の小羊よ、
私たちに平和を与えて下さい。

【閉祭の儀】

司祭によって閉祭の挨拶(Ite Missa Est・通常文)が述べられる。Ite Missa Estは「行け、これにて去れ」という意味で、この言葉から「ミサ」という名前が出ている。ただ単にミサが終わったから帰るというのではなく、教会から外へ信者を派遣することによって教えを広めていく、というニュアンスが込められている。

【謝 辞】

ミサ解説の転載を快く許可していただきました東京大学分子細胞生物学研究所の伊藤 啓先生にお礼申し上げます。

【参考文献】

1. Wolfgang Rehm: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 15: Konzerte für ein oder mehrere Klaviere und Orchester mit Kadenzen, Band 8, Bärenreiter Verlag (1960).
2. Monika Holl: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie I: Geistliche Gesangswerke, Werkgruppe 1: Messen und Requiem, Abteilung 1: Messen・Band 4, Bärenreiter Verlag (1989).
3. Monika Holl: Kritischer Bericht, Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie I: Geistliche Gesangswerke, Werkgruppe 1: Messen und Requiem, Abteilung 1: Messen・Band 4, Bärenreiter Verlag (1999).
4. Alan Tyson: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 33: Dokumentation der Autographen Überlieferung, Abteilung 2: Wasserzeichen-Katalog, Bärenreiter Verlag (1992).
5. Cliff Eisen: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 31: Nachträge, Band 2: Addenda zu Mozart・Die Dokumente seines Lebens neue Folge, Bärenreiter Verlag (1997).
6. H. C. Robbins Landon: Mozart The golden years 1781-1791 with 215 illustrations, 32 in colour and 27 musical examples, Thames and Hudson (1990).
7. H. C. Robbins Landon: 1791 Mozart's Last Year, Thames and Hudson (1989).
8. Alan Tyson: Wolfgang Amadeus Mozart, Piano Concerto No.26 in D Major ("Coronation") K.537, The Autograph Score, Dover (1991).
9. David Grayson: Whose Authenticity? Ornaments by Hummel and Cramer for Mozart's Piano Concertos in Neal Zaslaw ed., Mozart's Piano Concertos, Text, Context, Interpretation, The University of Michigan Press (1996).
10. Alan Tyson: Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987).
11. Ian Christians: The Hummel Project, <http://www.jnhummel.info/> (2009).
12. メリーナ・メディチ・マリニャーノ, ローズマリー・ヒューズ 共編, 小池 滋 訳: モーツァルト巡礼 - 1829年ノヴェロ夫妻の旅日記 (抄訳) -, 秀文インターナショナル (1986).
13. 属 啓成: モーツァルト〈II〉声楽篇, 音楽之友社 (1975).
14. 大宮 眞琴: ピアノの歴史 - 楽器の変遷と音楽家のはなし -, 音楽之友社 (1994).
15. 大宮 眞琴: モーツァルトの「戴冠式協奏曲」をめぐる四つの問題, 音楽芸術第49巻第12号46-55頁 (1991).
16. 伊東 信宏 編: ピアノはいつピアノになったか?, 大阪大学出版会 (2007).
17. 久元 祐子: モーツァルトはどう弾いたか, 丸善ブックス (2000).
18. 久元 祐子: モーツァルトのピアノ音楽研究, 音楽之友社 (2008).
19. オットー・エーリヒ・ドイッチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル編, 井本 响二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989).
20. 高橋 英郎: モーツァルト, 講談社 (1983).
21. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集III, 白水社 (1987).
22. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集IV, 白水社 (1990).
23. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995).
24. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001).
25. カルル・ド・ニ, 相良 憲昭 訳: モーツァルトの宗教音楽, 白水社 (1989).
26. クリストフ・ヴォルフ, 磯山 雅 訳: モーツァルト 最後の四年 - 栄光への門出, 春秋社 (2015).
27. 海老沢 敏: モーツァルトの教会ソナタ, モーツァルト研究ノート〈モーツァルト叢書1〉, 音楽之友社 (1973).
28. 高野 紀子訳・解説: 初期のモーツァルト伝(モーツァルト叢書18), 音楽之友社 (1992).
29. ミケル 正: ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック, ショパン (2001).
30. 白石 雅之: コール・シャンティー, ミサ通常文のラテン語解説 改訂第3版, <http://pierres-blanches.tea-nifty.com/blog/files/missa-ordinarium-ver3.pdf> (2011).
31. 伊藤 啓: ラテン語宗教曲、単語の意味と日本語訳, http://jfly.iam.u-tokyo.ac.jp/music/musica_sacra.pdf (1991).

大阪モーツァルトアンサンブル クラヴィーア協奏曲演奏記録

Werk		Tonart	KV Nr.	Datum	Ort	Solist(en)
Konzert für Klavier Nr. 1	Konzert nach Raupach u. Honauer	F-Dur	KV 37			
Konzert für Klavier Nr. 2	Konzert nach Raupach u. Schobert	B-Dur	KV 39			
Konzert für Klavier Nr. 3	Konzert nach Honauer, Eckard u. C. Ph. E. Bach	D-Dur	KV 40	1986/6/13	Takarazuka	Svetra Protitch
Konzert für Klavier Nr. 4	Konzert nach Honauer u. Raupach	G-Dur	KV 41	1987/12/27	Toyonaka	Svetra Protitch
Konzert für Klavier	Konzert nach Joh. Chr. Bach	D-Dur	KV 107/1			
Konzert für Klavier	Konzert nach Joh. Chr. Bach	G-Dur	KV 107/2			
Konzert für Klavier	Konzert nach Joh. Chr. Bach	Es-Dur	KV 107/3	1994/3/5	Toyonaka	Eriko Tori
Konzert für Klavier Nr. 5	<1. Fassung>	D-Dur	KV 175			
Konzert für Klavier Nr. 5	<2. Fassung>	D-Dur	KV 175			
Konzert für Klavier Nr. 5	<3. Fassung>	D-Dur	KV 175+382	2013/4/20	Toyonaka	Kyoko Tagawa
Konzert für Klavier Nr. 6		B-Dur	KV 238			
Konzert für drei Klaviere Nr. 7	"Lodron-Konzert" <1. Fassung>	F-Dur	KV 242			
Konzert für zwei Klaviere Nr. 7	"Lodron-Konzert" <2. Fassung>	F-Dur	KV 242	2012/10/6	Toyonaka	Kyoko Tagawa Miyuki Matsuda
Konzert für Klavier Nr. 8	"Lützow-Konzert"	C-Dur	KV 246			
Konzert für Klavier Nr. 9	"Jeune homme-Konzert"	Es-Dur	KV 271	1993/11/17	Kyoto	Noriko Saito
Konzert für zwei Klaviere Nr. 10		Es-Dur	KV 365 (316a)	2013/9/16	Toyonaka	Kyoko Tagawa Satoshi Kawaguchi
Konzertrondo für Klavier		D-Dur	KV 382	1990/10/17	Kyoto	Svetra Protitch
Konzert für Klavier Nr. 12		A-Dur	KV 414 (385p)	1986/6/13	Takarazuka	Svetra Protitch
Konzertrondo für Klavier		A-Dur	KV 386	2006/9/24	Toyonaka	Kyoko Tagawa
Konzert für Klavier Nr. 11		F-Dur	KV 413 (387a)			
Konzert für Klavier Nr. 13		C-Dur	KV 415 (387b)	1990/10/17	Kyoto	Svetra Protitch
Konzert für Klavier Nr. 14	"1. Ployer-Konzert"	Es-Dur	KV 449	1992/1/28	Kyoto	Ayako Hayata
Konzert für Klavier Nr. 15		B-Dur	KV 450	2004/6/6	Toyonaka	Kyoko Tagawa
Konzert für Klavier Nr. 16		D-Dur	KV 451	2007/4/29	Joyo	Chise Ohi
Konzert für Klavier Nr. 17	"2. Ployer-Konzert"	G-Dur	KV 453	2007/4/29	Joyo	Fumiko Sonoda
Konzert für Klavier Nr. 18	"Paradis-Konzert[?]"	B-Dur	KV 456	1987/12/27	Toyonaka	Svetra Protitch
Konzert für Klavier Nr. 18	"Paradis-Konzert[?]"	B-Dur	KV 456	2009/3/8	Toyonaka	Kyoko Tagawa
Konzert für Klavier Nr. 19	"2. Krönungs-Konzert"	F-Dur	KV 459	2006/9/24	Toyonaka	Kyoko Tagawa
Konzert für Klavier Nr. 20		d-moll	KV 466	1993/9/26	Toyonaka	Kazuyo Baba
Konzert für Klavier Nr. 20		d-moll	KV 466	1993/11/17	Kyoto	Reiko Maruyama
Konzert für Klavier Nr. 20		d-moll	KV 466	1997/1/5	Toyonaka	Etsko Tazaki
Konzert für Klavier Nr. 20		d-moll	KV 466	2005/6/25	Toyonaka	Kyoko Tagawa
Konzert für Klavier Nr. 21		C-Dur	KV 467	1994/6/30	Kyoto	Maya Saito
Konzert für Klavier Nr. 21		C-Dur	KV 467	2008/5/24	Toyonaka	Toshiko Nakano
Konzert für Klavier Nr. 22		Es-Dur	KV 482	1996/7/6	Toyonaka	Makoto Nakanishi
Konzert für Klavier Nr. 23		A-Dur	KV 488	1988/12/24	Toyonaka	Svetra Protitch
Konzert für Klavier Nr. 23		A-Dur	KV 488	2001/8/19	Toyonaka	Yoko Fukuda
Konzert für Klavier Nr. 23		A-Dur	KV 488	2003/12/14	Ritto	Kazuyo Baba
Konzert für Klavier Nr. 24		c-moll	KV 491	1992/6/14	Toyonaka	Eri Nakagawa
Konzert für Klavier Nr. 25		C-Dur	KV 503	1989/10/19	Kyoto	Kazuyo Baba
Konzert für Klavier Nr. 26	"Krönungs-Konzert"	D-Dur	KV 537	2004/11/27	Otsu	Kazuyo Baba
Konzert für Klavier Nr. 26	"Krönungs-Konzert"	D-Dur	KV 537	2016/1/30	Toyonaka	Kyoko Tagawa
Konzert für Klavier Nr. 27		B-Dur	KV 595	1990/10/17	Kyoto	Svetra Protitch
Konzert für Klavier Nr. 27		B-Dur	KV 595	1992/1/28	Kyoto	Ayako Hayata
Konzert für Klavier Nr. 27		B-Dur	KV 595	2010/1/10	Toyonaka	Fumiko Sonoda

大阪モーツァルトアンサンブル ミサ曲演奏記録

Werk	Dirigent	Solist(en)	Orgel	Chor	Ort/Datum
1.Missa brevis G-Dur KV 49 (47d)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 矢守 眞弓 (A) 宮本 佳計 (T) 青木 耕平 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか響ホール 第14回亀岡混声合唱団定期演奏会 2.11.2003
2.Missa "Waisenhaus Messe" c-moll KV 139 (47a)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 福原 寿美枝 (A) 宮本 佳計 (T) 小林 裕 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール 第11回亀岡混声合唱団定期演奏会 5.11.2000
3.Missa brevis d-moll KV 65 (61a)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか響ホール 第13回亀岡混声合唱団定期演奏会 4.11.2002
4.Missa "Dominicus Messe" C-Dur KV 66	板倉 計夫	町田 百々子 (S) 菊池 敏子 (A) 納多 正明 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール 第17回亀岡混声合唱団定期演奏会 3.12.2006
5.Missa brevis G-Dur KV 140 (Anh. C 1.12)	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか響ホール 第18回亀岡混声合唱団定期演奏会 2.12.2007

6.Missa "Missa in honorem Sanctissimae Trinitatis" C-Dur KV 167	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか響ホール 第16回亀岡混声合唱団定期演奏会 27.11.2005
7.Missa brevis "Kleine Credo-Messe" F-Dur KV 192 (186f)	板倉 計夫	片山 映子 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 青木 耕平 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか響ホール 第12回亀岡混声合唱団定期演奏会 4.11.2001
8.Missa brevis D-Dur KV 194 (186h)	板倉 計夫	土屋 栄 (S)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡市役所市民ホール 第5回亀岡混声合唱団定期演奏会 30.10.1994
9.Missa "Spatzen-messe" C-Dur KV 220 (196b)	板倉 計夫	町田 百々子 (S) 福原 寿美枝 (A) 宮本 佳計 (T) 青木 耕平 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール 第7回亀岡混声合唱団定期演奏会 27.10.1996
10.Missa longa "Spaur-Messe" C-Dur KV 262 (246a)	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール 第20回亀岡混声合唱団定期演奏会 29.11.2009
11.Missa longa "Große Credo-messe" C-Dur KV 257	板倉 計夫	緋田 芳江 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 今泉 仁志 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール 第9回亀岡混声合唱団定期演奏会 1.11.1998
12.Missa brevis "Spaur-Messe[?]" C-Dur KV 258	板倉 計夫		松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか響ホール 第19回亀岡混声合唱団定期演奏会 30.11.2008
13.Missa brevis "Orgelsolo-Messe" C-Dur KV 259	板倉 計夫	野口 裕子 (S) 矢守 眞弓 (A) 宮本 佳計 (T) 油井 宏隆 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか響ホール 第15回亀岡混声合唱団定期演奏会 28.11.2004
14.Missa brevis B-Dur KV 275 (272b)	今村 雅俊	山崎 直美 (S) 津田 秀子 (A) Van de Waalle (T) 大谷 仁士 (B)	後藤 緑	セレスチナ合唱団	姫路・姫路文化センター小ホール セレスチナ合唱団'86定期演奏会 7.12.1986
14.Missa brevis B-Dur KV 275 (272b)	板倉 計夫	野口 裕子 (S) 矢守 眞弓 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡市役所市民ホール 第6回亀岡混声合唱団定期演奏会 29.10.1995
14.Missa brevis B-Dur KV 275 (272b)	Seiji Makino	Francisca Montiel (S) Ruth Kramer (A) Moiseas Chaaves (T) Kurt Koller (B)	Gerhard Zukriegel	Salzburger Domchor	Salzburg・Salzburger Dom ミサ 5.11.1995
15.Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV 317	板倉 計夫	松井 美路子 (S) 福原 須美枝 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール 第8回亀岡混声合唱団定期演奏会 26.10.1997
15.Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV 317	武本 浩	高橋 照美 (S) 中屋 早紀子 (A) 五郎部 俊朗 (T) 黒田 博 (B)	小樽 由布子	大場 恭子、渡辺 有里香 大井 道子、福山 美由希 鈴木 准、高田 正人 酒井 崇、高澤 孝一	東京・カトリック麻布教会 モーツァルト劇場1998年5月例会 31.5.1998
15.Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV 317	板倉 計夫	内藤 千洋子 (S) 矢守 眞弓 (A) 納多 正明 (T) 油井 宏隆 (B)	松岡 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・ガレリアかめおか コンベンションホール 第26回亀岡混声合唱団定期演奏会 29.11.2015
15.Missa "Krönungs-messe" C-Dur KV 317	武本 浩	四方 典子 (S) 中原 由美子 (A) 松原 友 (T) 秋原 寛明 (B)	桑山 彩子	亀岡混声合唱団	豊中・豊中市立ローズ文化ホール 大阪モーツァルトアンサンブル第62回定期 演奏会 30.1.2016
16.Missa solemnis C-Dur KV 337	板倉 計夫	平井 久恵 (S) 菊池 敏子 (A) 宮本 佳計 (T) 藤田 武士 (B)	松園 洋二	亀岡混声合唱団	亀岡・亀岡会館大ホール 第10回亀岡混声合唱団定期演奏会 31.10.1999
Missa c-moll KV 427 (417a)	武本 浩	高橋 照美 (S) 佐竹 由美 (S) 五郎部 俊朗 (T) 黒田 博 (B)	小樽 由布子	赤池 優、井上 ゆかり、 大場 恭子、田中 詩乃 大井 道子、福山 美由希 大木 太郎、高田 正人 渥美 史生、杉山 範雄	東京・カトリック麻布教会 モーツァルト劇場1997年5月例会 18.5.1997
Missa c-moll KV 427 (417a)	武本 浩	高橋 照美 (S) 後藤 ちしを (S) 五郎部 俊朗 (T) 黒田 博 (B)	小樽 由布子	大場 恭子、渡辺 有里香 和泉 純子、大井 道子 三宮 美穂、福山 美由希 鈴木 准、高田 正人 酒井 崇、杉山 範雄	神戸・六甲カトリック教会 モーツァルト劇場1999年5月例会 大阪モーツァルトアンサンブル第30回定期 演奏会 30.5.1999
Requiem d-moll KV 626	今村 雅俊	林 裕美子 (S) 向井 順子 (A) 山下 文裕 (T) 井上 敏典 (B)	小樽 由布子	姫路CGS合唱団	大阪・大阪カテドラル聖マリア大聖堂 モーツァルト没後200年追悼ミサ 5.12.1991
Requiem d-moll KV 626	宮本 佳計	宮本 由里子 (S) 岡本 明美 (A) 中塚 昌昭 (T) 藤村 匡人 (B)	紺谷 昌子	混声合唱団アンサンブル・ マチネー	長岡京・京都府長岡京記念文化会館 混声合唱団アンサンブル・マチネー第10回 定期演奏会 26.11.2006
Requiem d-moll KV 626	武本 浩	北浦 百々子 (S) 鈴木 玲子 (S) 霜上 綾 (A) 霜上 さくら (A) 北浦 啓 (T) 山崎 大輔 (T) 稲生 啓行 (B)	桑山 彩子	混声合唱団CADENZA	豊中・豊中市立アーク文化ホール 大阪モーツァルトアンサンブル第45回定期 演奏会 30.6.2007
Litaniae Lauretanae B.M.V. B-Dur KV 109 (74e)					
Litaniae de Venerabili altaris Sacramento B-Dur KV 125					
Litaniae Lauretanae B.M.V. D-Dur KV 195 (186d)					
Dixit et Magificat C-Dur KV 193 (186g)					
Litaniae de Venerabili altaris Sacramento Es-Dur KV 243	今村 雅俊	尾崎 比佐子 (S) 向井 順子 (A) 畑 儀文 (T) 井上 敏典 (B)	三木 麻帆	セレスチナ合唱団	姫路・バルナサスホール セレスチナ合唱団創立50周年記念演奏 会 11.12.2005
Vesperae solennes de Dominica C-Dur KV 321					
Vesperae Solennes de confessore C-Dur KV 339	今村 雅俊	林 裕美子 (S) 向井 順子 (A) 山下 文裕 (T) 井上 敏典 (B)	小樽 由布子	姫路CGS合唱団	姫路・バルナサスホール 第5回CGSジョイントコンサート 11.2.1990